
木苺パニック！

上田サマナー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木苺パニック！

【Nコード】

N9945W

【作者名】

上田サマナー

【あらすじ】

兵庫の田舎に電車を撮りに来た伊藤ミナオと、ストロベリーパニックの月館千代が繰り広げる物語！！

出会いは播州赤穂！（前書き）

ストロベリーパニックが播州赤穂が舞台ではないので悪しからず？

出会いは播州赤穂！

私、伊藤ミナ才はどこにでもいる格好も普通の青年で20歳だ。

今、博多駅から新幹線で関西方面に向かっていた。

兵庫近郊の田舎で、たくさんの電車を撮るために！

「今日は、神戸近郊で沢山の電車を撮るぞ！なんせ相生駅や播州赤穂駅とかは生まれ変わる駅だからな！」

なに言ってるだか…

なんだかんだで、、無事に新幹線は相生駅に着いた。

ここから始まる撮り鉄の旅！ミナ才は心躍った！

「着いたぜ！相生駅！！」

まず、相生駅を下り、在来切符を買い播州赤穂駅に向かった。

途中は223系に乗った。

「さすが西日本の車両！新快速とかいいねえ」

そして無事に播州赤穂駅に着いた。

「早速、飯にするか！」

まず、飯にするようだ。

「関西ゆうたら、やはりタコ焼きだよな。播州赤穂駅周辺にもあるだろう」

早速探し始めた。

なんとかタコ焼き屋を見つけ出し、タコ焼きを買った。

「買った方がいいが…、タコ焼き食う場所がないやん……」

播州赤穂駅から離れ、いろいろと探し回った。

しかしなかなか見当たらない…

すると公園の門みたいな入口があった

「なんだこんなとこに森でおおわれた公園があったんか…よかった！公園で食べたかったから」

ミナ才は早速その門にタコ焼きと荷物を持って入っていった。

しかし、このことがミナ才を物語へと巻き込んでいく…！

百合（前書き）

第2話

播州赤穂に行ったことないが頑張って書きます???

百合

私は、タコ焼きとキャリーバックを持って、公園？森？の中をウロウロとしていた。

その時…

「あ、ベンチ発見や！しかも、前には池か…なかなか自然豊かやなあ…。」

ミナ才は、疲れたため息をだし、キャリーバックをベンチ脇に置き、ゆっくりと座った。

「ああ…疲れた…。播州赤穂駅まで長かったなあ…。」
タコ焼きをほおばりながら独り言を言った。

食べ終わると同時にウトウトと眠ってしまった。何時間が過ぎただろうか…

夢から覚めると、自分の顔を恐る恐る見る、小学生…？いや中学生？の様な風貌の今どきのオカッパの髪型をした美少女が居た。

「わあ！ビックリした！なんだ君は！？」

「そそそ、それはこちらの台詞ですよ（汗）。」

彼女はさらにオドオドして言った。

ミナ才は、寝る前までの事を思い出して、言い放った。

「いや、ここで昼ご飯たべとったんよ。ここ、公園だろ？別に寝とったっていいやないか！」

「ここは、公園ではありませんよ！（汗）聖ミアトル女学院の敷地内ですよ！」

「聖ミアトル？マジかよ？（汗）てか、私が女学院の敷地内に居たら変態と間違われるやないかい！」その時、奥の草むらからも音がした。

「ヤバいです！（汗）とにかく私について来て下さい！」

「ああ、その方が良さそうだな（汗）。」

ミナ才は、その小さな美少女の小さな手で手を引っ張られ、その美少女について行った。

途中、草むらを書き分けて行く最中に、遠くに見えていた池のほとりで女学生同士がキスしているのを見てしまった！

ミナ才の脳内（わ！百合つつつか、同性で…？）

ミナ才は呆気にとられたままその美少女に引っ張られて行った。

千代（前書き）

第3話です？

播州赤穂駅をY o u T u b eで見で、インスパイアしてます？

千代

僕は、呆気にとられたまま僕の手を引つ張って行つたオカッパ美少女の部屋？に連れられた。

「ハアハア…疲れた…。まったく…なんなんだよ。」ミナオは息切れしながら言った。

「ごご、ごめんなさい（汗）。誰かにばれるとマズイと思ったから。」

オカッパ美少女は、泣いていた。泣いていたと言ってもオドオド泣きの方だ。

「泣くなよ。わかつたよ。ありがとな！」ミナオはオカッパ美少女の頭を撫でながら言った。

「いえ、ありがとうございます」（泣）。私でも人の役に立ちました〜！」

「は、はあ…。よかつた…。なあ（汗）ありがと。ところで君、名前は？」

「月館つきだて 千代ちよひと申します。聖ミアトル女学院一年花組です！貴方は…？」

「ああ、俺は伊藤ミナオ。まあ、福岡からちよいと旅行に来たといつかそんな感じだな…。てか、君…月館ちゃんは中学生？」

「千代でいいですよ。私もミナオさんと呼びますね。はい。私は世

間的には中学生一年生です。聖ミートルは中高一貫なので、世間的な高校一年生は四年生と呼ばれております。」

千代は、丁寧の説明してくれた。

「てか、礼儀正しく、丁寧な言葉口調だね…？」ミナオは不思議そうに聞いた。

「はい、ミートル女学院は格式高い、いわゆるお嬢様学校でありますから。私も幼稚園から通っております。」千代はテキパキと簡単に説明してくれた。

「なるほどね…。ところで僕はどのように帰れ…」「ミナオが言う途中で部屋のドアから（ドンドンドンドンドン）と、聞こえた。

二人「！？（汗）」

やるしかない！（前書き）

第4話

播州赤穂駅の入線メロディー好き？

やるしかない！

(ドンドンドンドン)

二人は背筋が凍った。

「ヤベー…誰か来る。」ミナオは恐る恐る千代に聞こえる程度に話した。

「ととと、とりあえず私のベッドの下に隠れてくださいっ！（汗）」
千代は必死に言った。

「わわっわかった！」ミナオは、こう言いながら慌ててベッドの下に自身の荷物は、たんすに隠し、ベッドの下に入った。

千代はミナオが事を済ませた事を確認すると、恐る恐るドアを開けに行った。

「はっ…はい…どなたですか…？」

「ヤッホー！千代ちゃん！」元気ハツラツとした声。

「渚砂お姉様ですか？」

「そうだよー！」相手は、千代の先輩であり、現在聖ミアトル女学園4年生の渚沙という女性であつた。

「渚砂…？また厄介なのが来たな…（汗）。お姉様って…、先輩さんか…？」ベッドの下で息を殺して言った。

「なっ、渚砂お姉様っ！ なななっ 何の用事ですかっ…？」 かなり動揺した感じで言った。

「何って… 夕御飯の時間だから誘いに来たんだよ…？」

「ああっ！ そうですよ！ アハハ。」 千代は、開き直った感じでいった。

「千代ちゃん？ 大丈夫？ 今日は、おとぼけさんだね。」

「すすっ、すいません〜！（汗）」 千代が冷や汗をかきながら謝ったその時、渚砂が感づいたように聞いた。

「千代ちゃん…？ 部屋ん中… 男の子とか来てない…？」

「ビクッ（*ー*；）」

千代とミナオは同時に驚き、息をのんだ。渚砂はじっと千代を見ている。

「男性がこの学校に居るわけじゃないじゃなく！ 男性でいるのは、警備員が先生くらいでしょう。」 千代はこれ以上ツッコまないのでオーラを放ちながらいった。

「千代ちゃん…。」

前髪を下に垂らしたアニメで見るような、顔上半分を暗くして言った。

しばらく沈黙が続く。

「ヤベー…。感づかれたか……………！」 ミナオは、死を確信して思った。

二人に緊張が走る。

「だよね〜（笑）アハハ〜。ごめんね〜。」

渚砂はかなりウケていた。

千代&ミナオ「!?!」

「渚砂お姉様は、私をからかったんですか〜?」

千代は驚きの表情で聞いた。

「うんWごめんね〜。でも千代ちゃんかわいかったよ〜!」渚砂が言った。

「もう〜!お姉様ったらあ〜。」

ミナオ「たっ助かった…。」ミナオの心は和らいだ。「しかし、なんて先ば…お姉様なんだ…。勘がいいにも程があるぜ…。」かなり安堵してまるで、難関大学受験に合格したみたいと言った。

「とにかく、千代ちゃんご飯食べに行こ!」

「はっ、はい!お姉様。」

千代は、ミナオにどのように学校から脱出すればいいか提案しないうちに部屋を渚砂お姉様とやりに連れられでいてしまった。

ミナオはベッドの下から部屋を覗き込み、誰もいない事を確認すると外に出てきた。

「とにかく、なんてかして脱出しなくては…。完全に変態になって捕まってしまう!しかも13歳の女の子の部屋にいるという最悪の事態というね…。」

ミナオは、部屋の窓から外を見ながら
「やるしかない！」と思いながら言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9945w/>

木苺パニック！

2011年10月26日14時10分発行